

静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関するアンケート調査結果
－平成24年度－

平成25年11月25日
白木 賢信（常葉大学）

I 調査結果の概要

1. 利用団体の小学校相当世代への傾斜がさらに進み、利用宿泊数は「1泊」と「2泊」の占有率が殆どである。

利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）について、「小学校」「7～12歳」が最も比率の高いカテゴリで、直近の3ヶ年ではその比率が年々高くなっている。平成21年度までは「中学校」「13～18歳」の比率が徐々に高くなる傾向にあったが、平成22年度以降は小学校相当世代に偏ってきている。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」が全体の殆どを占めながら推移している。

2. 利用目標が最も比率の高い「自主性や協調性、社会性を身につける」が突出してきているのは変わりなく、利用目標の達成度は今年度になり「期待以上にできるようになった」の比率が高まっている。

利用目標とその達成度について、6ヶ年とも「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率の高い利用目標で、この比率が突出しているのは変わらない。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が殆どであるが、今年度になって「期待以上にできるようになった」の比率が高くなっている。

3. 利用後の参加者の変容について、上位3項目は6ヶ年とも変わらないが、今年度は「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない他）」の比率が高まっている。

利用後の参加者の変容について、「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」の上位3項目は6ヶ年とも変わらないが、平成21年度以降1ケタ台の比率で推移していた「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない他）」が、今年度は10%台に達している。

4. 繰り返し利用することによって予想される変容について、上位3項目は5ヶ年とも変わらないが、これらに続く項目は、今年度は「自然を大切にようになる」となっている。

繰り返し利用することによって予想される変容について、「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は5ヶ年とも変わらないが、これらに続く「仕事などを積極的にようになる」と「自然を大切にようになる」については、平成23年度までは「仕事などを積極的にようになる」が第4位であったが、今年度は「自然を大切にようになる」が第4位となっている。

II 調査の概要

1. 目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中、それ以外の評価指標としての基礎資料を提示するが、昨年度に引き続き、平成19～24年度の6年間における経年変化の傾向もあわせて提示することにしたい。

2. 内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

- (1) 利用団体の種類
- (2) 利用団体の主たる年齢層
- (3) 利用宿泊数
- (4) 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
- (5) 利用目標の達成度
- (6) 利用後の参加者の変容
- (7) 繰り返し利用することによって予想される変容

3. 対象

平成24年度のセンター利用団体

4. 方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は下記の通り。

- (1) センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙を配付する。
- (2) 各利用団体担当者は、センター利用後約1ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

5. 調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率） 159（29%） 有効回収率 159（29%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成24年度における統計上のセンター利用団体数（542団体）を母数としている。

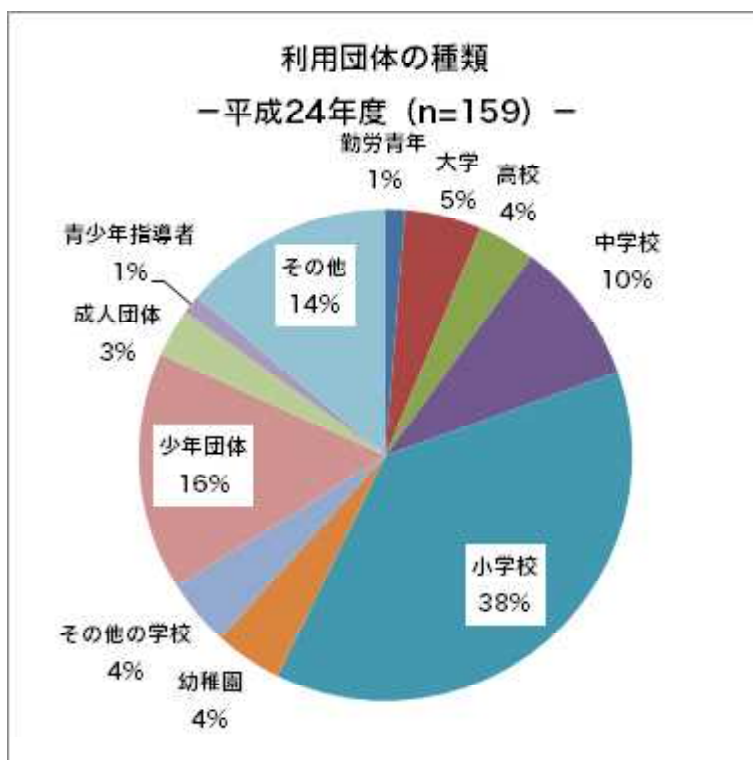
6. 実施期間

平成24年4月～平成25年3月

III 調査の結果

1. 利用団体のプロフィール

ここでは、本調査の対象となった利用団体のプロフィールについて述べることにしよう。まず、利用団体の種類についてであるが(図1)、最も比率が高いのは「小学校」の38%で、次いで高いのは「少年団体」の16%、さらに「その他」の14%が続いている。なお、学校関係は65%で全体のほぼ2/3を占めている。



「その他」の内訳(括弧内の数値は実数)

スポーツクラブ(2)、NPO法人、おやこ劇場、学童クラブ、学童施設、患者会、教育委員会、教会学校、行政主催の中学生を対象にした研修の団体、子育てサークル、子供会、サッカースポーツ団体、児童館、生涯学習推進会事業、スポーツ団体、テルモ株式会社、日曜学校(キリスト教)、ボーイスカウト、宮っ子トランペット鼓隊、吉田町教育委員会

図1 利用団体の種類

この利用団体の種類の平成19～24年度間の変化について示したものが図2である。これによると、「小学校」の比率については、平成22年度からの上昇傾向がさらに進み、今年度では40%近くに達している。「少年団体」「その他」「中学校」の3種類は、平成22年度以降では「小学校」に次ぐ種類として10%台に収斂されつつある。その他の種類はいずれも1ケタ台の比率で推移している。

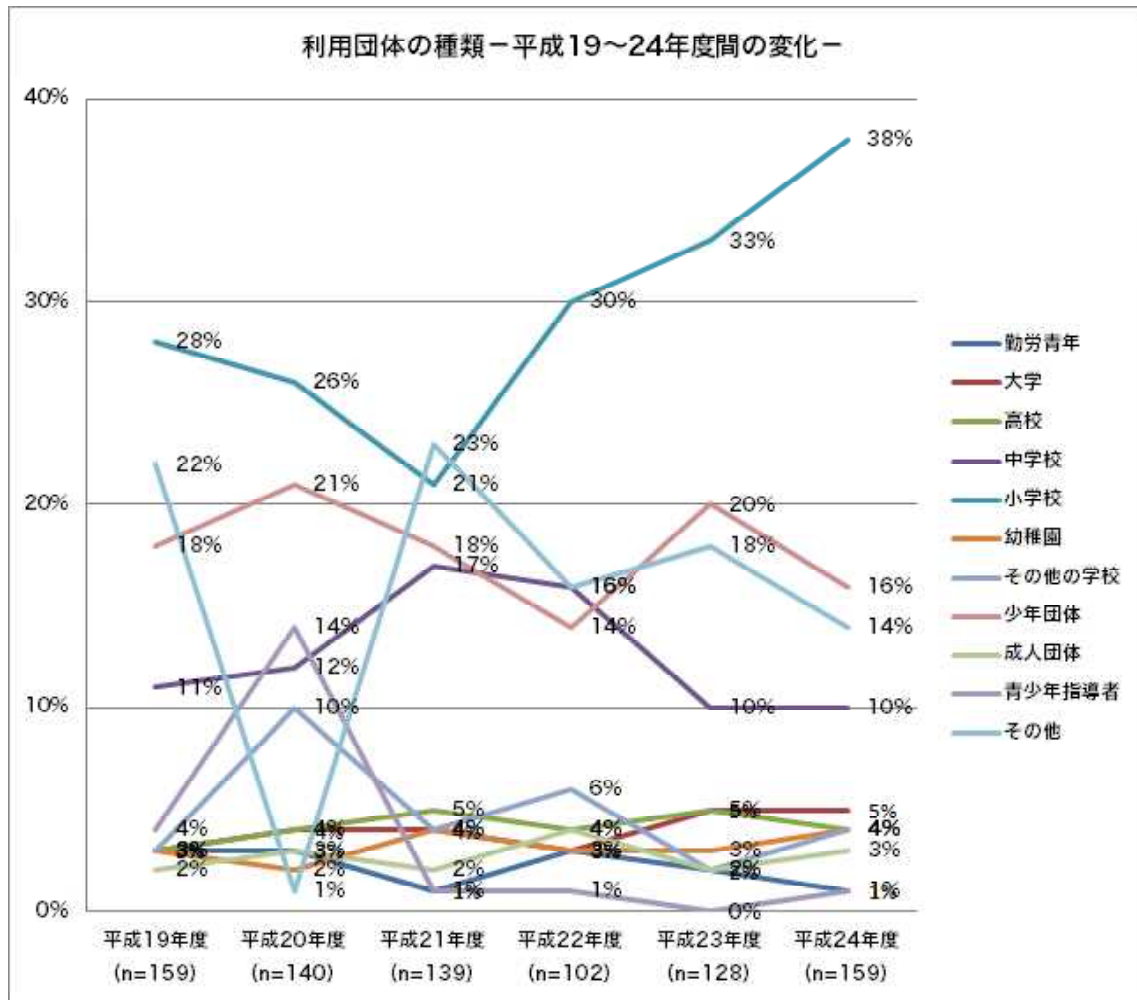


図2 利用団体の種類－平成19～24年度間の変化－

次に、利用団体の主たる年齢層については（図3）、「7～12歳」が64%で最も高く全体の2/3近くである。次いで高いのは「13～18歳」の18%である。

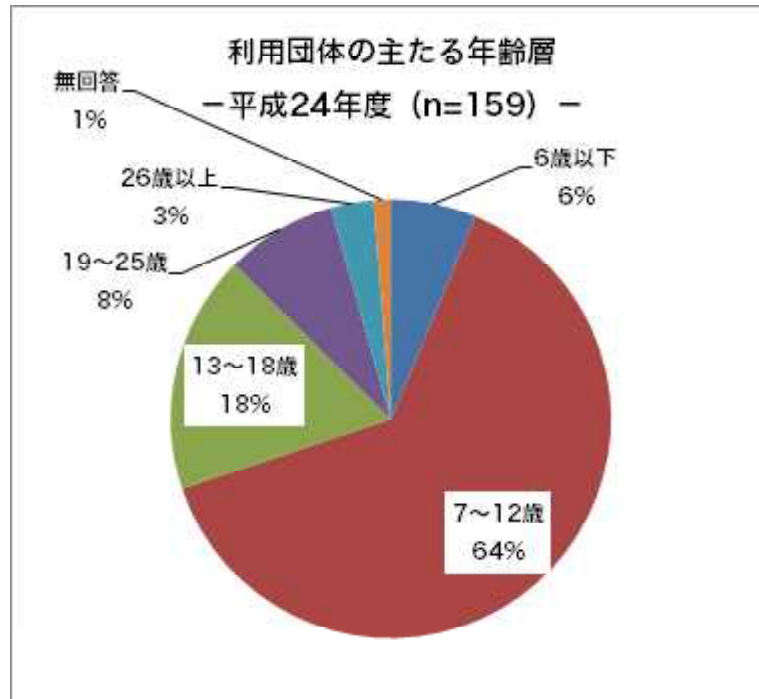


図3 利用団体の主たる年齢層

この利用団体の主たる年齢層を平成19～24年度の変化でみると(図4)、6ヶ年とも最も比率の高い「7～12歳」は今年度最高比率に達している。次いで高い「13～18歳」の比率は平成22年度からは低下傾向に転じているが、今年度は20%を切っている。なお、その他の年齢層はほぼ横ばいで、1ケタ台の比率で推移している。

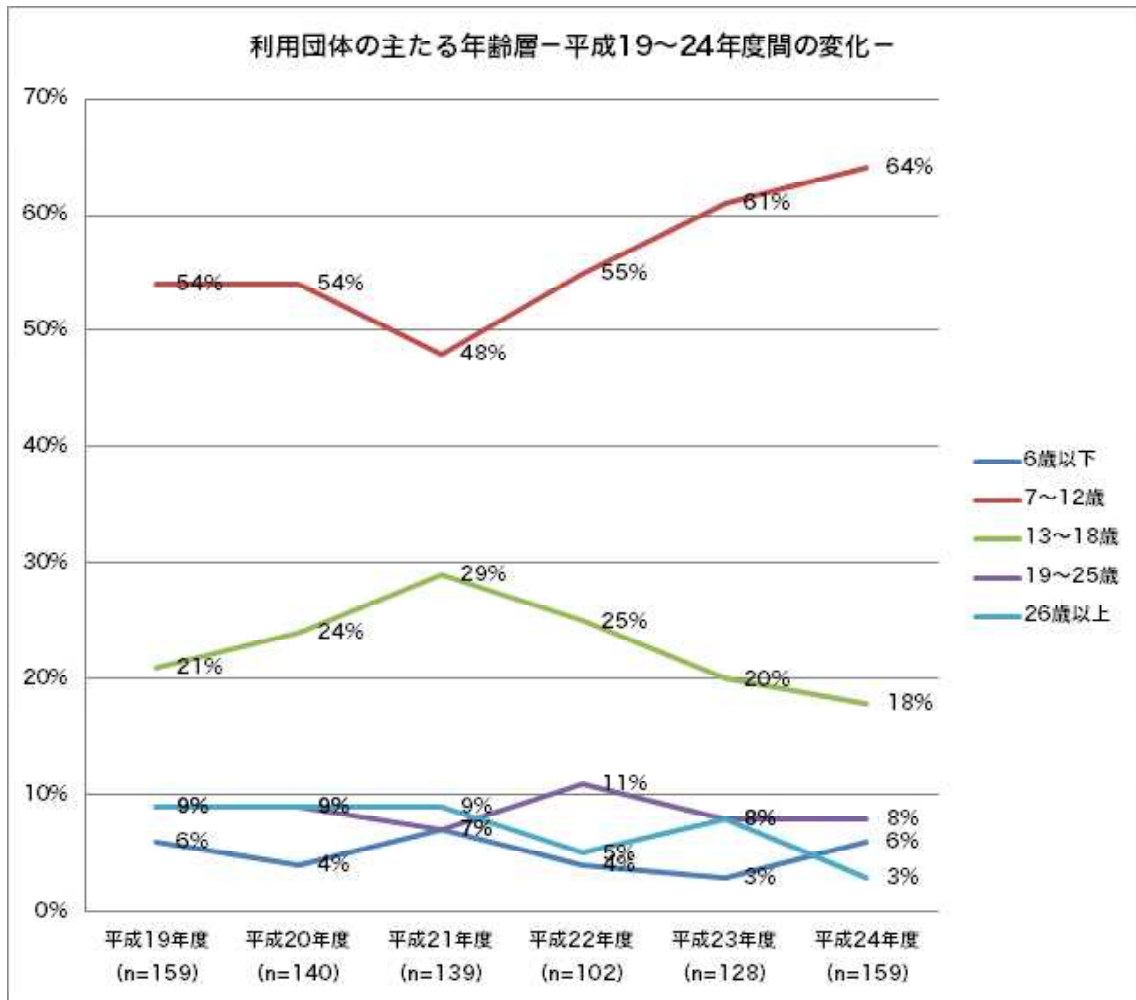


図4 利用団体の主たる年齢層－平成19～24年度間の変化－

さらに利用宿泊数については（図5）、「1泊」の比率が最も高く（44%）、次いで高い「2泊」（41%）も40%台で、両者で全体の9割近くを占めている。

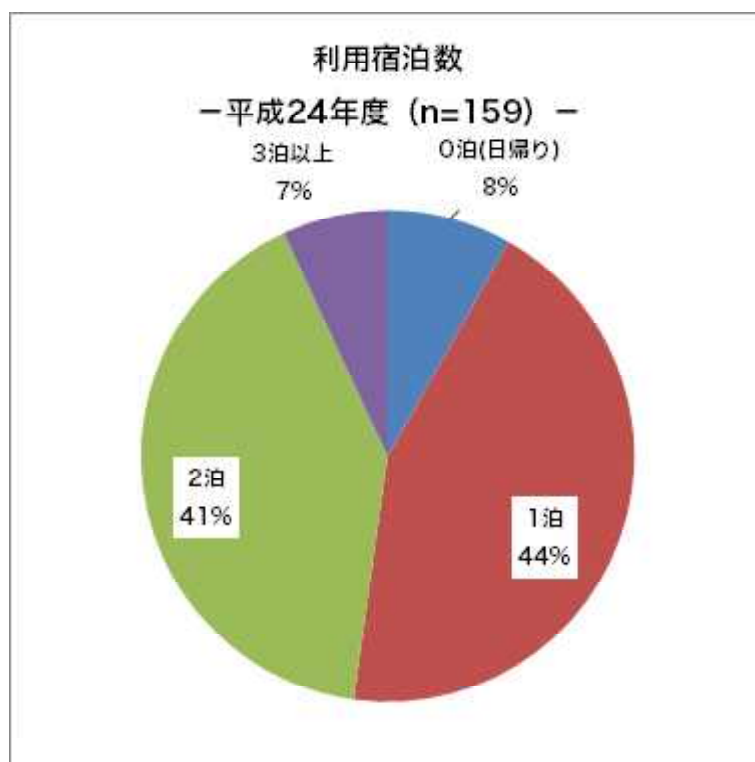


図5 利用宿泊数

この利用宿泊数を平成19～24年度間の変化でみると（図6）、今年度になって「1泊」と「2泊」の占有率は依然8～9割の間で推移している。両者に次いで比率の高い「0泊（日帰り）」、「3泊以上」の比率は年々接近してきている。

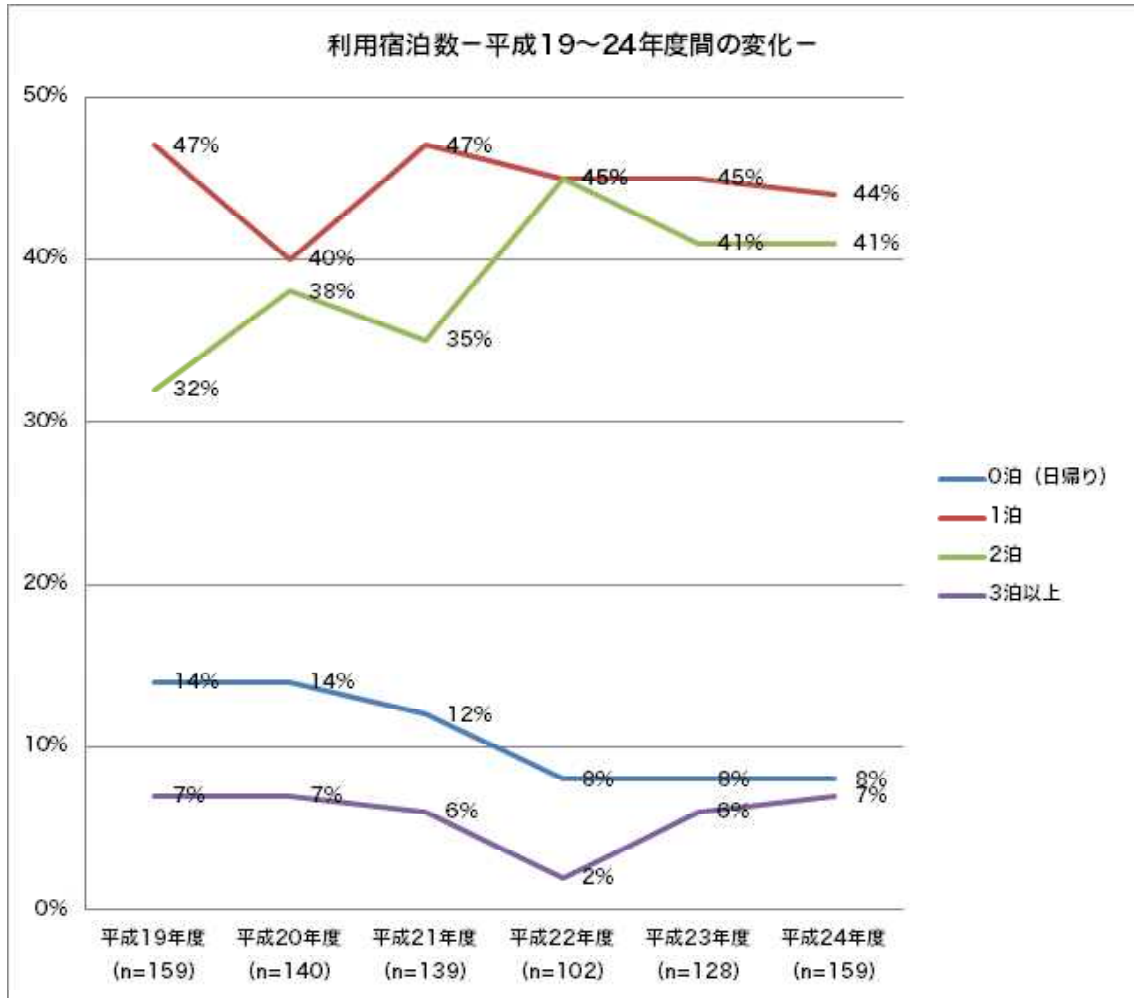


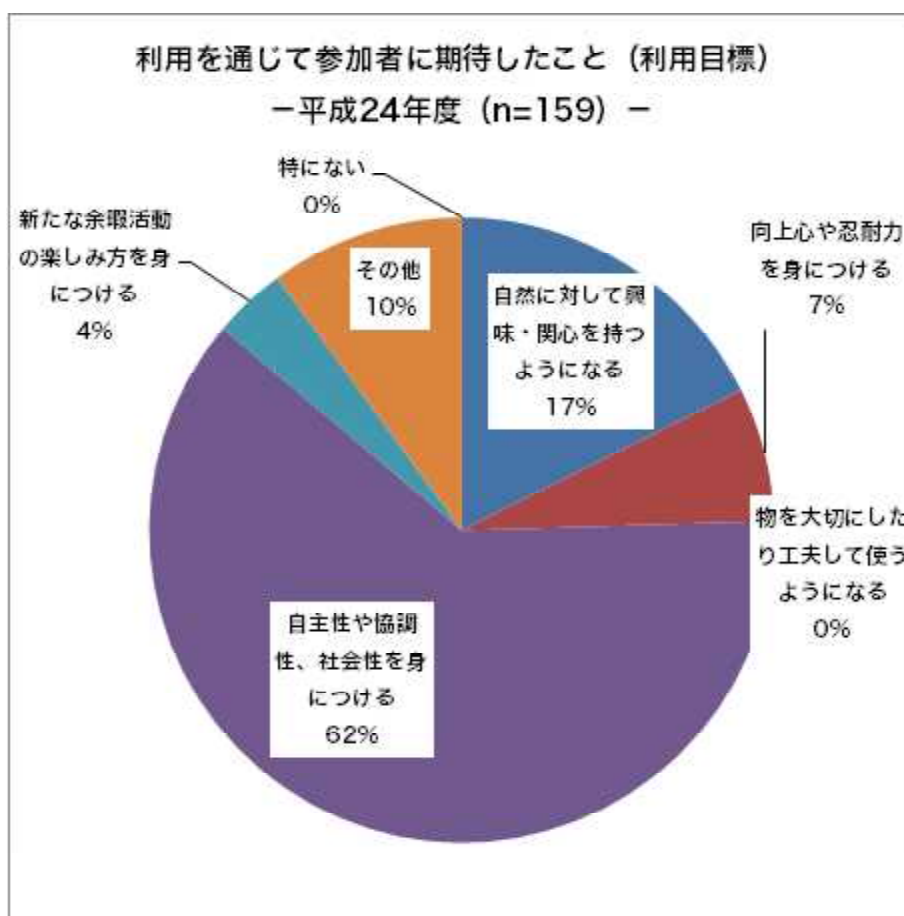
図6 利用宿泊数－平成19～24年度間の変化－

2. 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

ここでは、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を取り上げるが、ここでの項目は、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』（平成8年7月）で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした。上記会議および報告については下記URLを参照（平成25年11月18日現在）。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm

図7で示されるように、最も比率の高い利用目標は「自主性や協調性、社会性を身につける」の62%で、次いで「自然に対して興味・関心を持つようになる」（17%）、「その他」（10%）、が10%台で続いている。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

団体行動の強化(2)。海の町のため、山のできる体験をさせたい。規則正しい生活を通し、学生から社会人へ気持ち切り替えること。経営理念の成文化。指導者養成プログラムの一部。集団生活のルールやマナーを守ること。心身ともに健全な育成が図られること。親睦を深め、チームワークの向上を図る。電気を使わない不自由な生活を通し、今の生活を感謝する。テント生活を通して、不便な環境での生活体験。スケート教室。スケートの勉強、公共施設利用の仕方など。冬期スポーツ体験。初体験のスポーツを体感する。より効率よく練習が出来る場所を利用すること。

図7 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

この利用目標の平成19～24年度の変化については（図8）、「自主性や協調性、社会性を身につける」は6ヶ年を通じて最も比率の高い項目で60%前後で推移している。次いで比率の高い項目は年々変化が見られ、「その他」（平成19年度）、「自然に対して興味・関心を持つようになる」（平成20年度）、「向上心や忍耐力を身につける」（平成21年度）、「その他」（平成22年度および平成23年度）、「自然に対して興味・関心を持つようになる」（今年度）となっている。

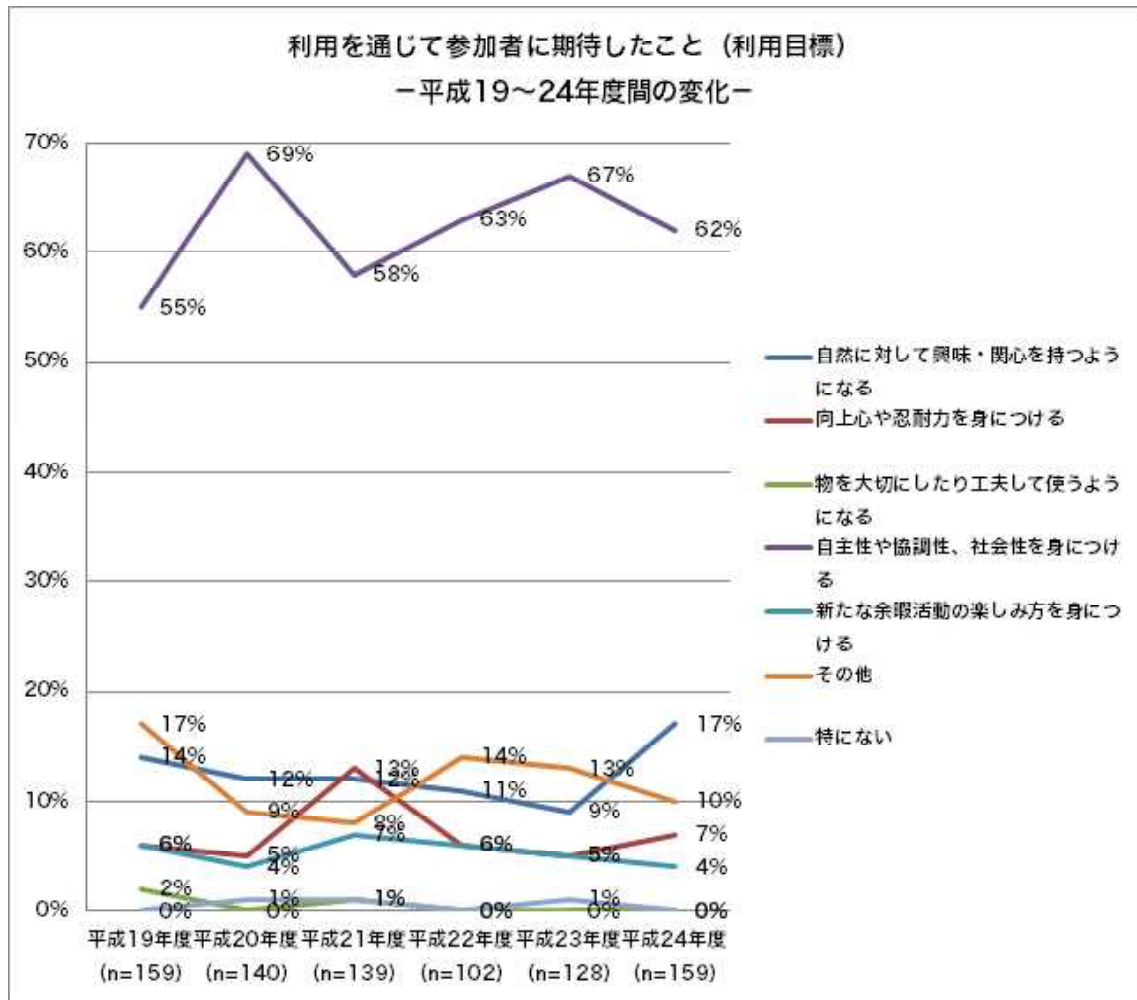


図8 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）－平成19～24年度間の変化－

3. 利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」のいずれかで各団体自身は団体が判断した（回答者は利用団体担当者であるが、その選定は各団体の任意による）。

その結果、図9のように、「だいたい期待通りできるようになった」の比率が最も高く（71%）、次いで高いのは「期待以上にできるようになった」の28%となっており、両者が全体の殆どを占めている。

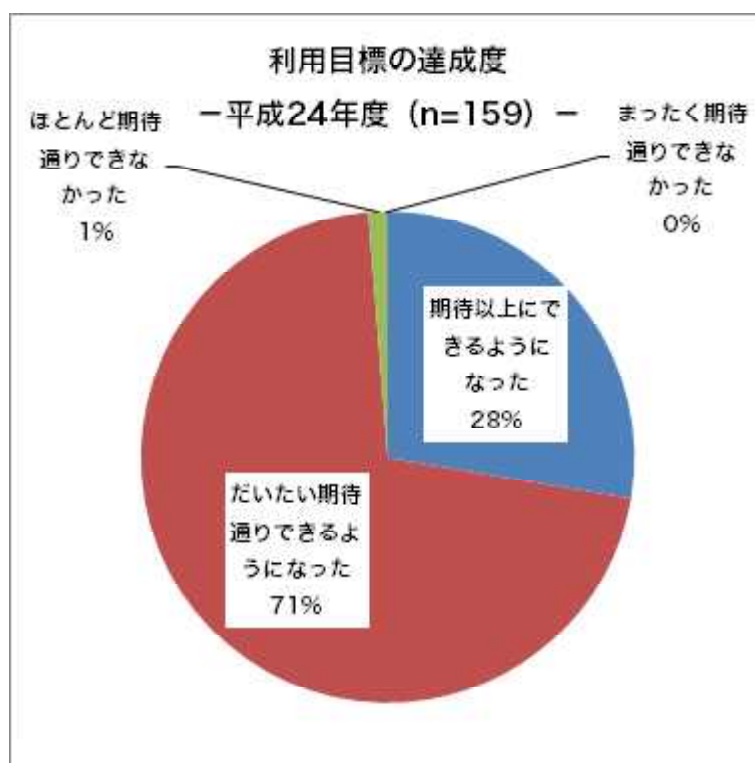


図9 利用目標の達成度

この達成度の平成19～24年度の変化については（図10）、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率は5ヶ年を通じて90%を超え、前述したように今年度にあってはほぼ100%である。「期待以上にできるようになった」の比率については、平成21年度から平成23年度まで徐々に低くなっていたが、今年度は昨年度から15ポイント上昇し、6ヶ年を通じて初の20%台に達している。

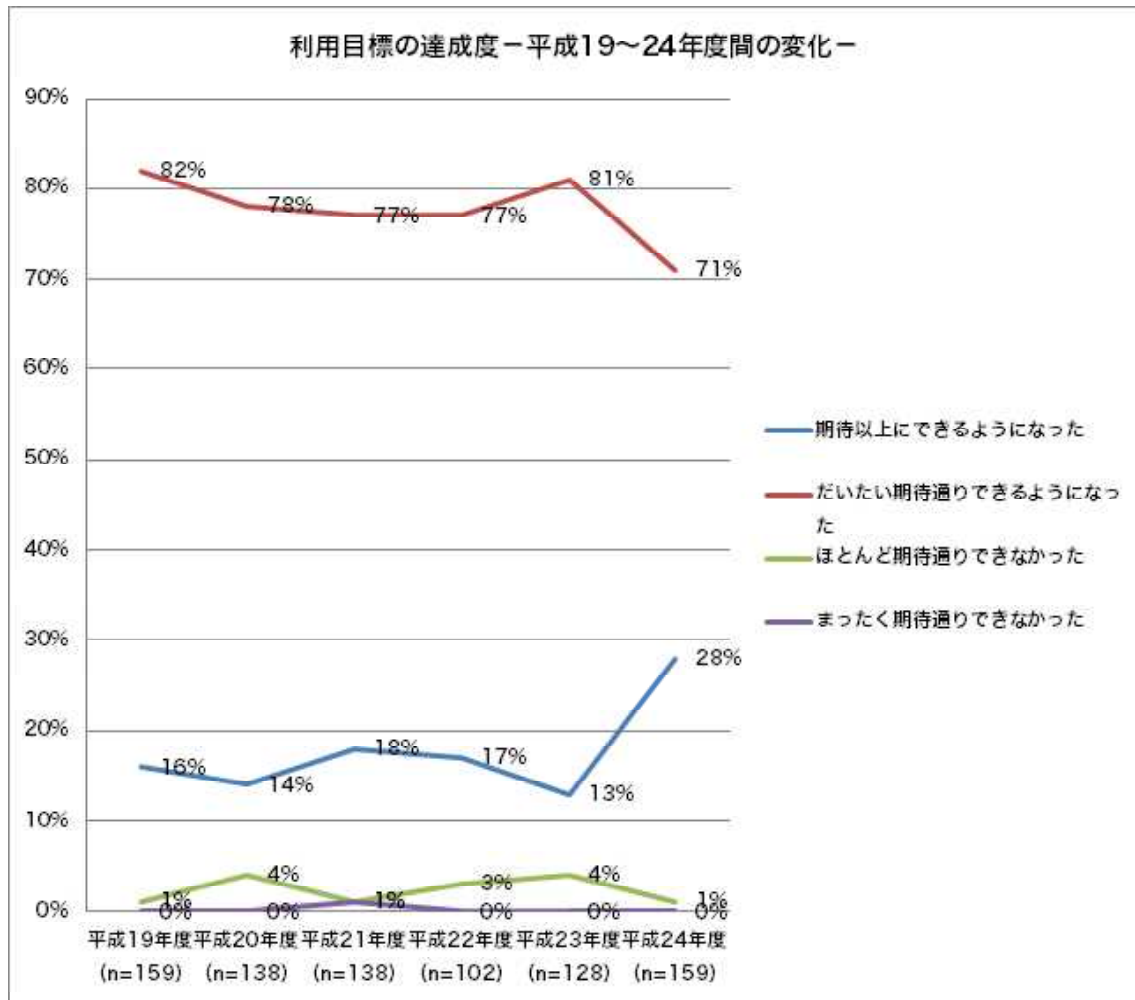
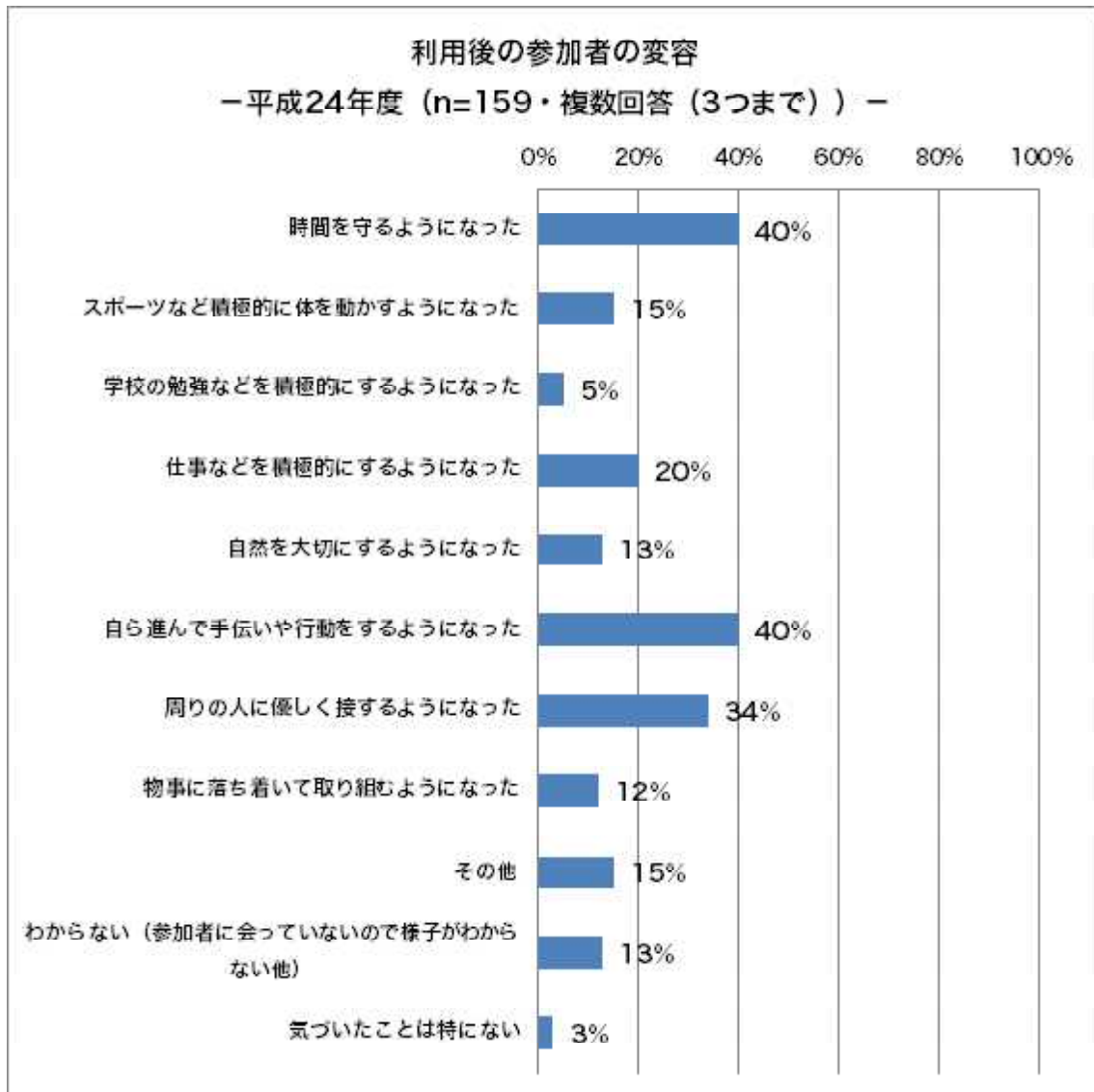


図10 利用目標の達成度－平成19～24年度間の変化－

4. 利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後1ヶ月以内の変容について利用団体担当者が分かる範囲で捉えているが（複数回答・3つまで）、その結果は、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」（40.3%）「時間を守るようになった」（39.6%）が4割程度である。次いで「周りの人に優しく接するようになった」（34%）が続いている（図11参照）。



「その他」の内訳

あいさつをより一層がんばるようになった。一生懸命練習することが上達につながる。上の子が下の子の面倒を見るようになった。関係が近くなった、仲良く打ちとけた。凝集性がさらに向上した。組のまとまりが強くなった。クラスに一体感が生まれている。参加者同士の絆が深まった。自分のことは自分でしようとしている様子がみられる。自立が促された。食べ残しがへった。男女が仲良く協力できるようになった。男女の仲がより交流できるようになった。年下の子の面倒をよくみるようになった。友達と協力して活動することの大切さに気づいた。仲間と協力して物事を進めるようになった。仲間との絆がさらに深まり、仲間と共に活動することに自信がついた。仲間のよい点を見つけることができた、きまりの大切さを改めて感じた。年代の違う子、はじめて会った子と積極的に交流する。他の参加者に会うのが楽しみになった。班やクラスで団結する力が強くなった。星について更に興味がわいた。周りがかがっていた子も、参加しはじめています。良い姿勢でしっかりと話をきいたり、集合整列して集団で移動したりすることが上手にできるようになってきた。

図11 利用後の参加者の変容

この平成19～24年度間の変化について(図12)、「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」は6ヶ年通じて上位3項目で変わりなく、30～40%台で推移している。これら3項目に次いで比率の高い「仕事などを積極的にするようになった」は20%台で推移している。また、「わからない(参加者に会っていないので様子がわからない他)」は、平成21年度以降は1ケタ台の比率で推移していたが、今年度は10%台に達している。

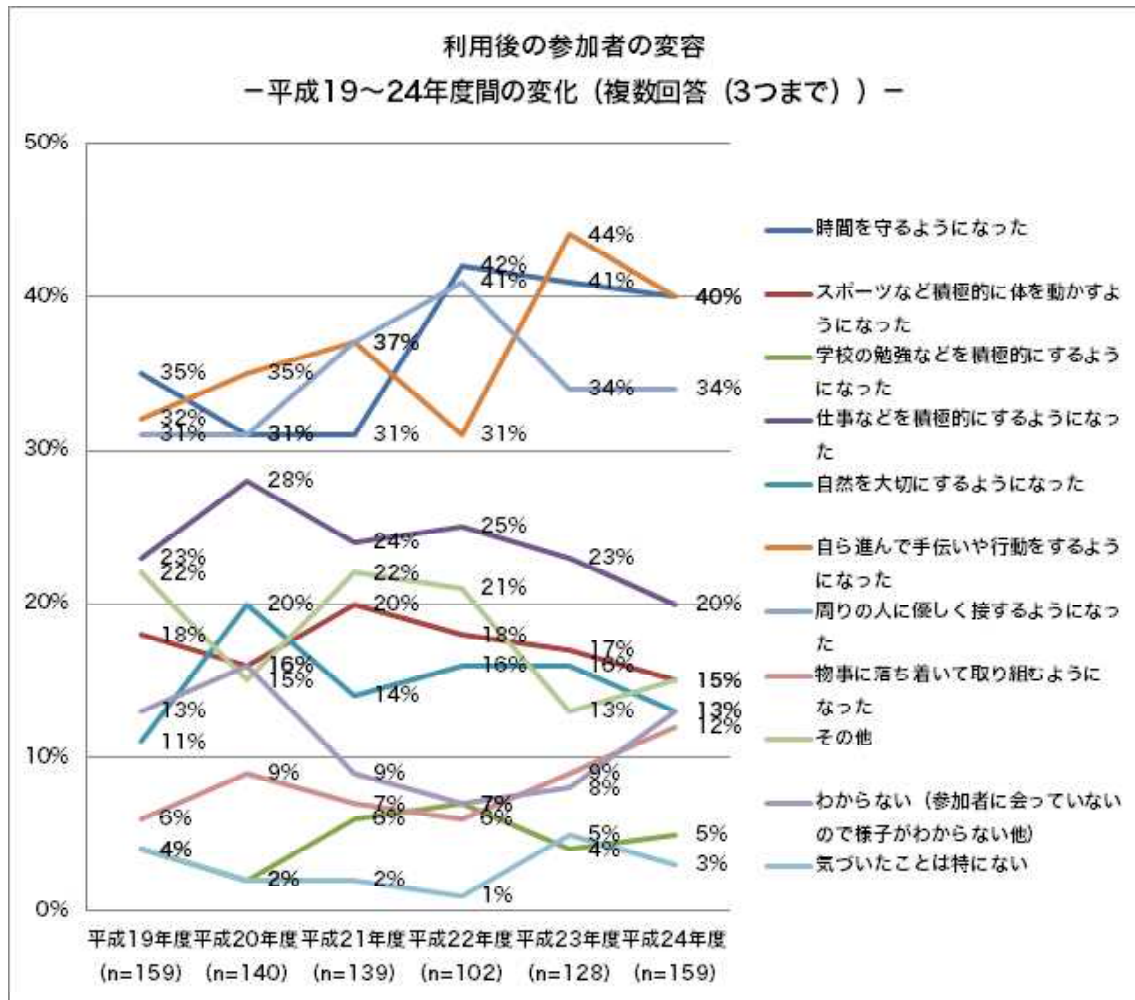
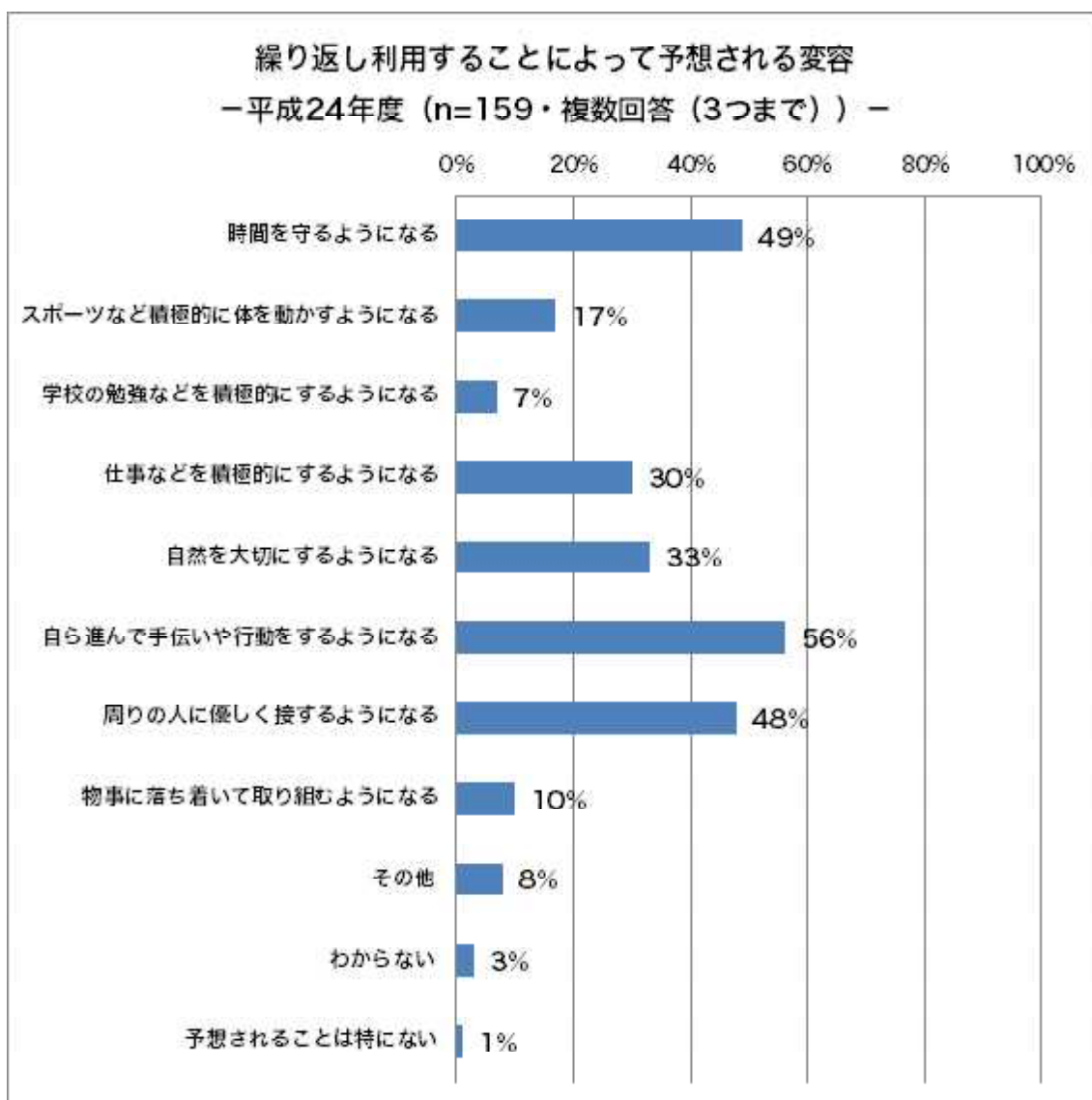


図12 利用後の参加者の変容-平成19～24年度間の変化-

5. 繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は、利用後の参加者の変容と同じ項目について、今回各団体がそれぞれ計画した活動を繰り返し実施することによって日常の参加者に現れると予想されるもので捉えている(複数回答・3つまで)。その結果(図13)、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」が最も高い比率で56%、次いで「時間を守るようになる」(49%)、「周りの人に優しく接するようになる」(48%)である。



「その他」の内訳 (括弧内の数値は実数)

あいさつ自然にできるようになる。新しいことにチャレンジしようとする。今の電気を使う生活に感謝するようになる。会社の発展。協調性up。協調性が生まれ、チームや組織で行動することで大事な姿勢を理解できるようになる。交友関係が広がる。食事の中で嫌いな物も食べるようになる。集団で活動する事の楽しさ、やってみて出来る様になった時の達成感、物を作る事の楽しさ。星座に興味を持つ、家族でスケートに出かける。友だちと協力できるようになる。周りを見て行動したり、見通しをもって活動したりできるようになる。未体験への挑戦する勇氣。

図13 繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は平成20年度調査から加わった項目であるため、図14の通り5ヶ年の変化を示すことになるが、それによると5ヶ年とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するよう

になる」の上位3項目は変わらない。次いで、「仕事などを積極的にするようになる」と「自然を大切にするようになる」が30%前後で推移しているが、平成23年度までは「仕事などを積極的にするようになる」が第4位であったが、今年度は「自然を大切にするようになる」が第4位となっている。

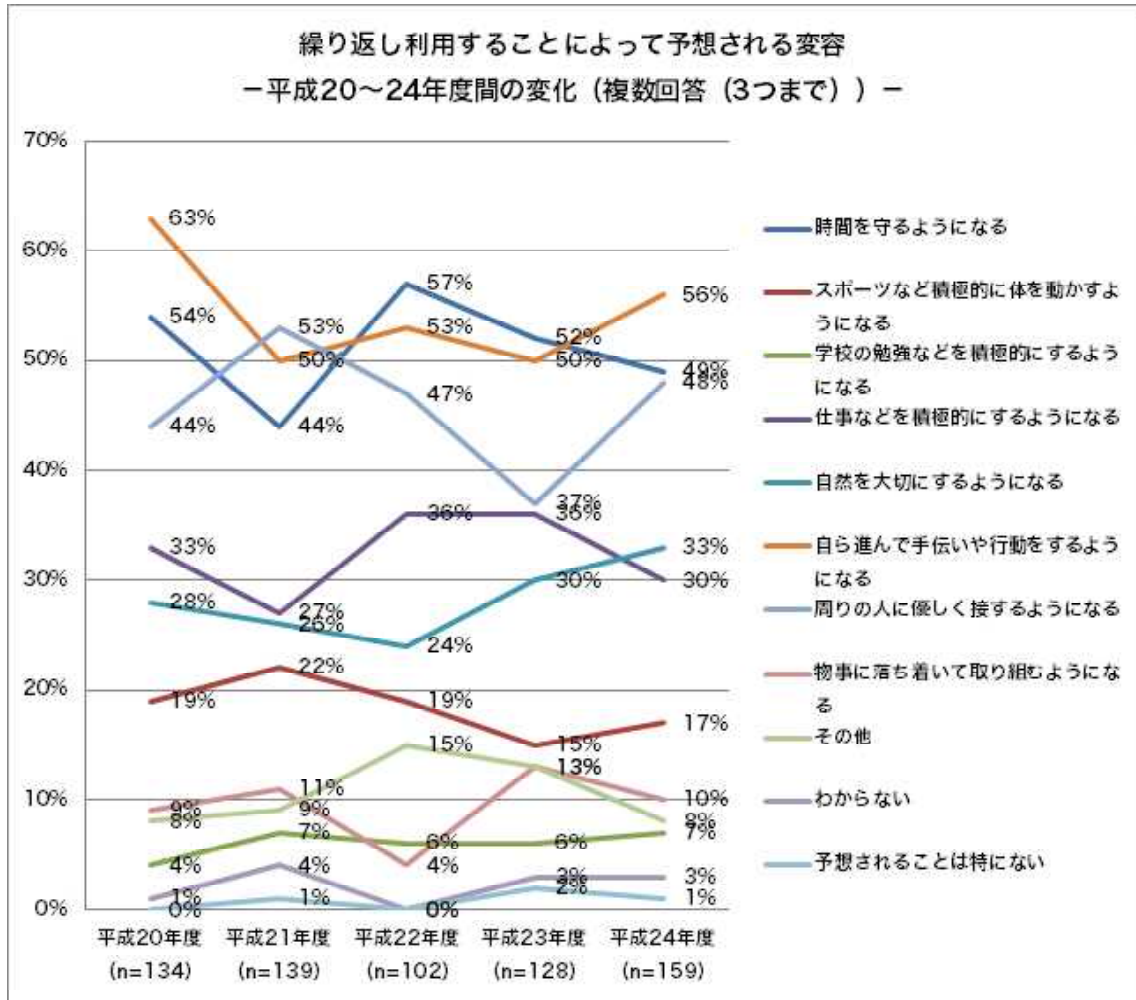


図14 繰り返し利用することによって予想される変容－平成20～24年度間の変化－

IV 調査結果のまとめと今後の課題

今回の調査結果は、次の4点にまとめることができる。

第1に、利用団体のプロフィール(利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層)について、「小学校」「7～12歳」が最も比率の高いカテゴリで、直近の3ヶ年ではその比率が年々高くなっている。平成21年度までは「中学校」「13～18歳」の比率が徐々に高くなる傾向にあったが、平成22年度以降は小学校相当世代に偏ってきている。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」が全体の殆どを占めながら推移している。

第2に、利用目標とその達成度について、6ヶ年とも「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率の高い利用目標で、この比率が突出しているのは変わらない。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が殆どであるが、今年度になって「期待以上にできるようになった」の比率が高くなっている。

第3に、利用後の参加者の変容について、「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」の上位3項目は6ヶ年とも変わらないが、平成21年度以降1ヶ台の比率で推移していた「わからない(参加者に会っていないので様子がわからない他)」が、今年度は10%台に達している。

第4は、繰り返し利用することによって予想される変容についてで、「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は5ヶ年とも変わらないが、これらに続く「仕事などを積極的にするようになる」と「自然を大切にできるようになる」については、平成23年度までは「仕事などを積極的にするようになる」が第4位であったが、今年度は「自然を大切にできるようになる」が第4位となっている。

最後に今後の課題について、今年度新たに見られた傾向の検証の観点から述べておくと、次の2点が挙げられる。

その第1は、利用目標の達成度について、「期待以上にできるようになった」の比率が高まっているが、これが果たして今後どう推移していくのか追究していく必要がある。さらにその要因として、利用目標の種類、利用団体のプロフィール、センターの環境条件等さまざまなものが考えられるが、そのうち何であるかまでは未解明なので、その要因分析も進めることが期待される。

第2は、利用後の参加者の変容について、「わからない(参加者に会っていないので様子がわからない他)」の比率が高まっている点の原因分析である。このことは、各利用団体担当者がセンター利用後約1ヶ月の間に質問紙に回答の上でファックスで送るという、調査手法の特徴が絡んでいる可能性も考えられるので、それとあわせてサンプルの特徴に変化が生じてきたのかどうか検討する必要がある。